

人文・社会科学

問 題 冊 子

指 示

合図があるまでは絶対に中を開けないこと

1. この試験は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができるかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に**40**の問題（**1-40**）があります。配点は**80**点満点です。解答カードには表裏あわせて**50**の解答欄がありますが、**41**以降は使用しないで下さい。
3. 解答のための時間は、正味**80**分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて**80**分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります。答えの記入のしかたが指示どおりでない、正解でも無効になります。
5. 答えはすべて、解答カードの定められた枠の中に鉛筆を用いてマークして下さい。
それ以外のところに書いたり、また答え以外のものを書きこんだりすると無効になります。
6. 一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを定められたとおりに、はっきりマークして下さい。
7. メモにはこの問題冊子の余白を用い、ほかの紙は使用しないで下さい。
8. 「解答やめ」の合図があったら、ただちにやめて下さい。試験監督が問題冊子と解答カードを集め終わるまでは、退室できません。
9. この指示について質問があるときは、試験監督に聞いて下さい。ただし問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答カードの定められたところに忘れずに書き入れること

(余 白)

言葉と故郷

はじめに

人は共同体をつくり、各人はその一部となって生きている。「共同体に入りこめない者、あるいは自足していて他に求めることのない者」があれば、共同体のいかなる部分ともならないゆえに、その者は「したがって野獸か神であるということになる」とアリストテレスは『政治学』において述べている。人は一対の男女から始まり、家族、村落、都市国家（ポリス）へと、善いものをめざして自然に集まり共同体をつくる、と彼は言う。それが蜂や群棲動物ぐんせいぶつと違うのは、動物のうちで「ひとり人間だけが言論（ロゴス）をもつ」からである。

政治学者のベネディクト・アンダーソンによると、小さな村落まではともかく、國家の規模になった共同体の構成員は大多数の同胞を直接知ることはない。国民とは、自然にできた集合ではなく、「イメージとして心に描かれた想像の政治共同体である」。それはとりわけ国民国家という形で登場してきた。このとき言語は、アリストテレスとは違った意味で共同体と関係する。「19世紀半ばまでに、すべての君主が国家語としてどこかの俗語を採用」した。人間はみなロゴスを持つが、それを働くための言語は国家によって異なり、国家語自体が変わることもある。もし人がひとつの共同体から、言語を異にする別の共同体へ所属を変えることを強いられる場合、言語が国家語であるなら、それは同時に、故国を失うことを意味する。その不条理な運命を、人はどのように受けとめ生きるのであろうか。われわれは存在論的な故郷にも言及しながら、いくつかの例を挙げ、そのことについて考えてみようと思う。

1

経済のための移動

2014年から2017年までフランスの国民教育・高等教育・研究大臣を務めたナジャト・ヴァロー＝ベルカセムは、1977年にモロッコの小さな村に生まれた。土地の言語はベルベル語で、村には電気も水道もなく、ヤギを飼いニワトリと遊ぶ彼女の朝の日課は井戸の水汲みだった。フランスの建設現場で働いていた父親が、彼女が5歳のときに家族を呼び寄せ、一家は北フランスの都市で暮らすようになる。そのとき捨てなくてはならなかったものなどを、彼女は、みずからの半生を記した自伝でこう語っている。

子供時代の国を捨てる。私の洋服、私の友だち、私のヤギ、部屋、埃もいっしょに、単語

もいっしょに。さあ、書くのよ、ナジャト。つまり、あなたの国を捨てる。そしてあなたの国の言葉も。だって私は当時ベルベル語を話していたのだった、母と同じように。そしてあっという間に、フランス語がすべてを運び去った。

「さあ、書くのよ、ナジャト」……そこには、自分を鼓舞し、それを直視するようみずからに強いなければ言葉にできない、ある特殊な痛みのありかが感じられる。彼女は異国の文化および社会への同化についてこう語っている。

亡命を経験した人は、たとえそれが、戦争によらない比較的穏やかな亡命であっても、全力を生活に注ぎ込む。適応しなくてはならない。〔中略〕言語に慣れなくてはならない。そして同時に、見えない言葉遣い、体の、においの、眼差しの言葉遣いに。

そこでは、ベルベル語からフランス語へ、という言語間の移行とともに、比喩的に彼女が「言葉遣い」と呼ぶものの習得が行われなくてはならなかった。

2

故郷への旅と言葉

詩人のダンテは、「われわれの心に抱くところを他人に明かす」のが、人が言葉を話す目的なのだと14世紀初頭に著した『俗語詩論』で述べている。けれども言葉の本質は他者へ思いを伝えることとは別のところにあると主張する者がいる。

哲学者のマルティン・ハイデッガーは終生をほぼドイツで過ごした。だが奇妙にも彼は異郷の旅をしていた。彼の眞の故郷は地図上には存在していない。彼が「故郷」と名付けるのは、存在の親しい近さのことだ。ここでいう「存在」は、個々の存在物を指しているのではなく、〈存在する〉ことそのものを指している。彼の考えによれば、人間は、この存在からの根源的で親密な呼びかけを聞き取り、それに応えてみずからを開き、その開けた明るみのなかに出で立つことが求められている。そこにおいて人間はみずからの本質のうちに生き生きとあり続ける。それが故郷にいるということなのだ。ほかの動物とは違って人間だけにそれができるのは、人間に言葉が与えられているからだ。「言葉は存在の家である」と彼は比喩的に断言する。言葉は「存在の真理のうちに住むための住まい」なのである。しかし人間は言葉のこの本来的なあり方を忘れ、非本来的な使い方をしている。後者について、彼は次のように記す。

言葉は、人々の間のいろいろな交通路の媒介に奉仕するだけの手段になり下がり、その交通路の上では、あらゆる事柄を、あらゆる人々に対して、一様に接近可能にすることとしての対象化という働きが、いかなる限界をも無視して、広がってゆく。

つまり人と存在との関係においてではなく、人と人とのコミュニケーションの道具としての言語の使用である。このような言葉の使い方をしていると、人は人へ応答する者でしかなくなり、存在からの呼びかけに応じようという心構えではなくなる。すると存在のほうから存在者を見捨て去る事態が生じ、こうして存在者は存在に見捨てられたまま故郷を忘れる。それが近代人にあらわれている「故郷喪失」の実体である、とハイデッガーは警告する。故郷喪失とはすなわち存在忘却のしるしなのだ。われわれは異郷をさまよっている。だが、いつかもう一度存在へとおのれを開き、故郷へ帰還しなくてはならない。「私たちは〔中略〕存在の近隣のうちへと歩みゆく旅人として、途上にとどまり続けようと思う」と彼は決意を述べている。

歌人の若山牧水の有名な短歌「幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく」^はは、彼の人生のコンテクストにおいては、恋人と離れている寂しさを詠ったものだが（歌人の伊藤一彦によれば、「『恋の国』を限りなく旅し続けたいという熱い思い」が詠われている）、もしハイデッガー的な読み方をすれば——というのも、ハイデッガーは詩をしばしば自分の哲学と響きあうものとして、作品の書かれた状況や条件から切り離して、独自に解釈したからだ——まったく別の解釈も可能になるだろう。

3

故郷の置き換え

ハイデッガーとは違う故郷への帰還についてみてみよう。*Exile's Return: A Literary Odyssey of the 1920s* は作家・批評家のマルカム・カウリーが書いた青春年代記で、初版は1931年に出版された。*Reflections on Exile and Other Essays* は文学研究者のエドワード・サイードのエッセイ集で2000年に出版された。両書にはそれぞれ邦訳（日本語訳）があり、そのタイトルは、前者が、1960年に出たときには『亡命者帰る：失われた世代の文学遍歴』だったが、2008年の新訳では『ロスト・ジェネレーション：異郷からの帰還』へと替えられ、後者（1）は『故国喪失についての省察』（2006年）となっている。『故国喪失についての省察』に収められている同題のエッセーのなかでは、訳語は細かく枝分かれして、原文の『exile』は、英語発音のカタカナ表記「エグザイル」や、ルビをふっての「故国喪失」、「故国喪失者」、「亡命」、「流民」、

「追放」などに訳し分けられる。

カウリーの描くエグザイルは、第一次大戦が終わったあと、「金儲けばかりの世界で自分を異邦人のように感じ、蒸気船のチケットを買うだけの金が貯まるとすぐさまヨーロッパに向けて旅立った」若者たちだ。生きる意味が失われている故国・合衆国を離れ、ヨーロッパを放浪した若者たち、いわゆる「ロスト・ジェネレーション」の作家たちを指している。彼らは「故国離脱によってのみ、個人生活においても芸術においても突き当たっていた袋小路からの脱出が可能となる」と考えていた、と研究者のカレン・カプランは述べている。それはある意味では美化された亡命であり、彼女が言うには、彼らは自分が属する合衆国の「移民たちが置かれた状況や、〔中略〕人種的、階級的緊張について頭を悩ますこともなく、脱出のなかに慰めを見出した」青年たちであった。つまり「亡命」とはここでは一種の比喩に過ぎない。

「エグザイル」を「故国喪失」とした訳語の選択には、「亡命」という語が帯びてしまった審美的な価値をもたらす意味作用の（A）が意図されているのだろう。じっさい、「エグザイル」であることの悲哀は、大地の堅さと、それがもたらす喜びとの接触を失うことにある。故郷に帰還することなど、まずもってできない」とサイードは言う。この場合、失われた世代の作家たちは、サイードの分類ではエグザイルではなく、「故国放棄者」（expatriate）となる。彼によればそれは「個人的あるいは社会的理由から、みずからすんで故国を捨て異国の方に暮らす者」を指すのであって、彼らは「フランスに住むのを余儀なくされたわけではない。故国放棄者は、エグザイルと同様の孤独感と疎外感を共有しているかもしれないが、厳しい追放令のもとで苦しんでいるわけではない」のだ。

サイードによると、エグザイル（故国喪失者）は、「世俗の偶発世界」においては、「^ホ_ニ^ー_ム故郷=家庭は一時的なものである」ことを知っている。「故郷=家庭」はわれわれを「慣れ親しんだテリトリーという安全圏」に囲い込んでいるが、ときには「牢獄にもなりうる」。これにたいして「エグザイルは境界を横断する」のだと彼は言う。そして12世紀の修道士、サン=ヴィクトルのフーゴーが書いた一節を引用する。サイードが引用している文章は以下の通りだ。

自分の故郷がすばらしいと感じている者は、まだ弱々しい未熟者にすぎない。あらゆる土地が自分の故郷であると感ずる者は、すでに強くなっている。しかし世界が残さず外国の地であると感ずる者は、完璧である。強い人間は、自分の愛をあらゆる場所に広げた。完璧な人間は、自分の愛を消滅させるのである。

（「故国喪失についての省察」）

この一節は、邦訳の注によるとフーゴーの『ディダスカリコン』に入っている。その原典

(ラテン語) の邦訳を見ると、それは「流謫の地について」という章に出ている言葉で、先立つ文章を加えると、次のようになっている。

全世界は哲学する者たちにとって流謫の地である。〔中略〕祖国が甘美であると思う人はいまだ纖弱な人にすぎない。けれども、すべての地が祖国であると思う人はすでに力強い人である。がしかし全世界が流謫の地であると思う人は完全な人である。第一の人は世界に愛を固定したのであり、第二の人は世界に愛を分散させたのであり、第三の人は世界への愛を消し去ったのである。

(『ディダスカリコン』)

「故国喪失についての省察」の邦訳では「未熟者」の説明が抜けているが、そのことは^{おも}いておこう。ラテン語で書かれた『ディダスカリコン』の邦訳には訳者による注が付されており、フーゴーが別のところに書いている「全世界は、天国が祖国であるべきであった者たちにとっては流謫の地である」という文章を参照せよ、としてある。

この参照に従うなら、「世界への愛を消し」た「完全な人」には、地上における祖国のかわりに、「天国」が祖国として設定されることになる。すると、サイードがフーゴーの文章を引用しながら次のように述べるとき、われわれはその主張を前にして慎重にならなくてはならない。

フーゴーが念を押しながら明確にしているように、「強い」あるいは「完璧な」人間は、固着を拒否するのではなく固着をくぐりぬけることで、独立した超然とした姿勢を獲得できるのである。

サイードは「強い人間」と「完璧な人間」を並列しているが、フーゴーの場合、(B) いまだ低次のレベルにいる。この完全な人が祖国としている場所、天国を、サイードもわれわれに推奨しているのだろうか。「独立した超然とした姿勢」を支えるもの、それは、おそらく修道士が指し示す天国ではない。では、この超越的な場所は空位のまま放っておかれるのだろうか。サイードはひとつの操作をほどこす。天国のかわりに別のものを置くのだ。それは彼がドイツの批評家アドルノについて語りながら次のように言う場所である。「アドルノの〔現代の管理社会を批判する〕省察の背後には、現在、存在する唯一の故郷^{ホーム}とは〔中略〕著述のなかに存在するのだ (only home truly available now [...] is in writing) という信念がある。」

「書くこと」が故郷となる……だが、この故郷はどのような言語で成り立っているのだろうか。それは無条件に喜ばしい故郷なのだろうか。

書くことと消し去られるもの

旧ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国はかつて六つの共和国で構成されていた。冷戦終結後、そのうち四つの共和国が1991年から1992年にかけて独立したが、ボスニア＝ヘルツェゴビナでは独立をめぐって共和国内の民族が対立し内戦が勃発した。ヴェリボル・チョリッチはこのボスニア出身の作家である。彼はボスニア軍の兵士だったが、1992年に脱走してフランスへ亡命し、その後難民認定された。Ofpra（フランス難民及び無国籍者保護局）のインターネット・ホームページには「著名な難民」として彼が写真入りで紹介されている。

2016年に出版された彼の『亡命マニュアル：亡命を成功させるための35課』という、自伝ともフィクションともつかない本は、次のように始まる。「僕は28歳、レンヌに到着する、荷物はフランス語の三つの単語だけ——ジャン、ポール、そしてサルトル。他にも持っているものはある、兵隊手帖、五十ドイツ・マルク、ボールペン一本、ユーゴスラヴィアの商標が付いている擦り切れたグリーン・オリーブ色の大きなスポーツバッグ。」物語のなかの時間は1992年夏。「レンヌ」というのはフランス西部の都市である。「荷物」という語はここでは「持っている知識」という意味で使われている。

彼はラジオ番組で、亡命を成功させるには高い代償を払わなくてはならず、ある部分で少し死ななくてはならない、自分の場合、亡命の間に大きなものを諦めた、つまり自分の母語を、と語っている。

『亡命マニュアル』の語り手は、母語が「もはや何も意味しない」国にいる自分について「僕は遠くにいる、そしてこの『遠く』が僕の祖国となり、運命となった」と語る。この「遠く」という奇妙な祖国で彼は「亡命者として、僕の第二の実存」を始めなくてはならない。第一の実存の終わりの時期、彼は銃を撃っていた。「僕は見えない敵に向かって発砲する。そのあと隠れて吐く。それからどこか他所を空想する、どこでもいい。状況が絶望的になればなるほど、ぼくの夢は甘美になる。」夢や空想のなかにある「他所」が過酷な現実のなかにいる彼を支えていた。彼は「雲の司令官」となって「雲を召喚し」、雲に命令する。「ただちに我らの空を去り、もっと穏やかで賢い他所の青〔=青空〕をみつけるように」と。彼のいう第二の実存のなかで、彼はみずからを「亡命者」、「難民」と自己規定し、寄る辺ない身の上を「忘却でびしょ濡れになった犬」と表現する。そんな存在になってしまった彼を支えているのは何だろうか。実は、サイードが示していた「書くこと」とほぼ同じものである。自分は「現代の最も偉大なユーゴスラヴィアの抒情詩人だ」という自負なのだ。ただし彼は自分の母語が通じない国でそれを証明しなくてはならない。ここに彼の、ユーモアと皮肉の混じった苦い意識がある。

語り手ヴェリボルはパリへ行き、通訳付きで OFPRA（チョリッチのテクストではこう表記されている）の事務所を訪れ、担当の婦人にフランス国家による保護と政治的庇護を要求する理由を説明する。婦人はメモを取り最後に「あなたフランス語は話せますか」と彼に聞いた。彼は通訳の翻訳を待って英語で答えた、「はい、完全にフランス語を話します」。そしてレンヌへの列車に乗るのである。

*

「母語がもはや何も意味しない国」……ハンガリー出身のアゴタ・クリストフもそのような国へ難民として避難した人のひとりだった。ハンガリー事件（1956年）の際、21歳の彼女は生後4ヶ月の娘を連れ、十人程の集団で国境線を越え、隣国オーストリアへ逃れた。そして受け入れ国のスイスへ移送され、いわば偶然のなりゆきで、フランス語圏の町へ振り分けられ、そこで生活することになった。その時のことを彼女は自伝的な物語『文盲』のなかで次のように記している。「この日、1956年11月のこの日、私はひとつの国民への帰属を決定的に失った。」彼女は故国に対してもよそ者となつたのだ。

朝早くバスに乗り、時計製造工場へ行き、一日中単純作業をし、夕方帰宅するという毎日の繰り返し。フランス語は彼女が学んだことのない言語だった。そのことを彼女は現在形でこう語る。「ここからこの言語を征服するための私の闘いが始まる。一生続くことになる長く激しい闘いだ。」その後30年以上もフランス語を話し、20年もその言語で書いているのに、「私がその言葉を話すときには常に間違いがあり、頻繁に辞書を引いて助けを借りなければそれを書くことができない」。しかも「この言語は私の母語を殺している最中なのだ」。そのため彼女はフランス語を「敵である言語」と呼ぶ。

彼女にとって、「書くこと」は祖国と言えないことはなかった。というのも、『文盲』には次のように書かれているからだ。

私の国を捨てなかつたら、私の人生はどんなものになつていただろう。もっと辛く、もっと貧しかつた、と私は思う。でも今より孤独ではなく、引き裂かれてもいなかつた。幸せだつたろう、たぶん。

ひとつだけ確信していることがある。それは、私は書いていただろう、ということだ。
どこであろうと、どんな言語であろうと。

母語殺しをしながら書く。そのような形での「書くこと」をサイードがアドルノに認める『home』の名で呼ぶことはできるものだろうか。アゴタ・クリストフは、晩年、フランス語

では自己像の忠実な表象はできないと考えるに至り、断筆した。借り物の自己と言語を去り、ふたたび真のアイデンティティとハンガリー語を見出すことになったのだ。『文盲』に彼女はこう書いている。「始めには、たったひとつの言語しかなかった。対象物も、事物も、感情も、色も、夢も、手紙も、本も、新聞もこの言語だった。」

言葉・事物・故郷

亡命者や難民となって言語の異なる国へ行くとき、人はハイデッガー的な深みのうちにというよりは、多様な事物が表面に現象している世界の中で日常生活者として生きることがまずは必要となる。

ハンナ・アーレントはドイツ出身のユダヤ人思想家で、政治的行為や政治的態度を規定する条件を明らかにする仕事をした。彼女はナチ政権下のドイツを1933年に逃れ、フランスを経て1941年に合衆国へ亡命したが、彼女の伝記作者によると、30代半ばの彼女はまず何よりも「生活費を稼ぎ、生き延びるために」英語を学ばなくてはならなかった。というのも、当時彼女が母語のドイツ語以外に身につけていたのは、ギリシャ語、ラテン語、フランス語だったからだ。その彼女は1964年のドイツ語による対談で母語について、「母語に代わるものはありません」と語っている。外国語習得の過程で「母語を忘れるすることはできるかも」しれないが、そのようにしてうまく使えるようになった外国語は、「決まり文句が次から次へ続くものになるのです。というのも、自分自身の言語にはあった生産力が、その言語を忘れたときに奪われてしまったからです」と説明する。いっぽう彼女自身については、「私はいまだに強いなまりがありますし、慣用表現を使えないこともしょっちゅうです」と語っている。

ヒトラー以前のヨーロッパが二度と存在しないことを寂しく思うか、ヨーロッパに来る際、何が残り何が救いがたく失われたという印象をもつか、と質問され、彼女はこう言い切っている。

ヒトラー以前のヨーロッパですか？ 何の郷愁もありません。残ったものですか？ 残ったものは、言葉です。

つまり、ある意味で、言葉が彼女の故郷であり続けたのだ。「私はつねに意識して、母語を失うことを拒んできました」と彼女は語っているが、いっぽう母語を忘れている人びとについては、それは抑圧の結果であることが多かったとも語っている。

アーレントは、自分の仕事が影響力をもつようになることを望むか否かを問われ、自分がやりたいのは影響力をもつことではなく、理解することだと答えている。そこにおいても「故郷」のイメージが喚起される。「私が理解したのと同じ意味で他のひともまた理解する」とき、「故郷で安らぐようなある種の充足感を覚える」と言うのである。彼女にとって大切なのは「思考の過程」そのものであり、「何かを考え抜くことができた」とき、そして「適切に表現できたとき」満足を感じるとも語っている。

*

リトニア出身の詩人で映像作家のジョナス・メカスは、ナチ占領下のリトニアから弟と共に1944年に逃亡し、戦後ソ連の共和国となった祖國には、反共産主義の彼は戻ることができず、二人でドイツを転々としたあと、1949年、26歳のときに合衆国へ渡り、ニューヨークで暮らし始めた。貧しく、孤独で、アゴタ・クリストフと似て、玩具を組み立てる単純作業の労働に従事したりした。アーレントと違ってリトニアは彼にとっての愛する祖國だった。彼は日記のなかで、リトニアは自分が絶望しているとき、そこへ逃げ込める女性のようなものだ、と書いている。ただし「夢のなかでしか彼女のものとへ逃げこめないのだが」。とはいえたまは「いちど故郷を出たら、故郷はない」とも1950年の日記に記している。旧ソ連から独立したあとの祖國の地をふたたび踏むまで、リトニアは現実には喪失され夢のなかにあるだけの故郷だった。

その故郷がもたらす「深み」は現実の細部と共にある。1948年の日記にはこう記されている。「知識？ 本？ ああ、そんなものはここにもあった。しかし、心の奥深くでどうしようもなく疼くもの、それは後にしてきた大地、空、あのたくさんの丘だ。」それは感覚と結びついている世界である。

ここの地面に触れる——すると、あの別の土が私のなかで目覚める。ここの空を眺める——しかし、あの別の空を見ている。押し車、熊手、鋤、肥料カートのようなもの、あるいは秋風のなかで光っている蜘蛛の巣〔中略〕なんの変哲もないのにと人は思うかもしれない。しかしこれらはすべて、限りない深みに刻みつけられている。その川の流れの曲がり方には、特別の意味がある。〔中略〕そこの雨の音の響き方に、意味がある。他のものとは違う響き〔中略〕これは極小の違いなのだ、ほとんど見過ごされそうな細部。……それらのなかにすべてが一つに燃り合わされている、他の国とは違うこの国独自の魂がそこにある。

そのような細部は、彼という個人を作ってもいる。メカスは独特的の表現で自己と祖國およびそ

の歴史との関係をこう記している。「彼ら〔何世代にもわたるリトニアの人々〕は、蜜蜂のように私の細部を少しづつ集め、それらを繋いで私を造った——私のすべてを。」

おわりに

われわれが取り上げた人々は、それぞれの分野で有名になった人で、いわゆる名もなき庶民が亡命や難民生活のなかで経験した苦難や喜びを必ずしも代表するものではない。彼らが身を置いた異郷において、故郷のあり方も違っていた。けれどもそこには、自分が求める生のあり方の熱烈な希求があった。それが阻害されたとき、もし石のように黙り込み、悟りすましてしまえば、それもある意味では幸福かもしれない。作家のアルベール・カミュは、その幸福をもたらす沈黙を「城砦の沈黙」と表現してこう言っている。「人間たちの不幸はすべて城砦の沈黙から彼らを引き離す希望から来る。」逆説的だが、人はその希望と不幸を選び取る必要があり、それはひとつの反抗である。その意味で、言葉も振る舞いも、人間を抑圧し虐殺する体制を隠蔽する美しい飾り、遮蔽幕であってはならない。偽りの美しいイメージを信用していると、そのうち、メカスの言葉を借りるなら、われわれは「ぬけがらにされて捨てられるだろう」。

沈黙から引き離す希望は人を言葉へと連れ出す。そこに真実があればそれは故郷になるだろう。逆に、国家語としての言語で真実を語ることが不可能になれば国家はもはや祖国ではなくなってしまうだろう。それでもそこには、メカスの言うような、独特の雨音、川のカーブ、光、手作業の道具類を持つ故郷は残っているのかもしれない。しかしそれさえも利便性や功利性の名のもとに消えてしまえば、愛の対象となる祖国は残るのだろうか。

参考文献

- ベネディクト・アンダーソン、『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』（白石さや、白石隆訳）、N T T 出版株式会社、2001年（1997年）。
- ハンナ・アーレント、「何が残った？ 母語が残った——ギュンター・ガウスとの対話」（矢野久美子訳）、『アーレント政治思想集成1』、みすず書房、2002年。
- アリストテレス、『政治学』（田中美知太郎他訳）、中央公論社、『中公クラシックス』、2009年。
- Velibor Čolić, *Manuel d'exil: Comment réussir son exil en trente-cinq leçons*, Gallimard, « folio », 2016.
- マルカム・カウリー、『ロスト・ジェネレーション：異郷からの帰還』（吉田朋正、笠原一郎、坂下健太郎訳）、みすず書房、2008年。
- マルティン・ハイデッガー、『「ヒューマニズム」について』、筑摩書房、『ちくま学芸文庫』、1997年。
- サン＝ヴィクトルのフーゴー、『ディダスカリコン』（五百旗頭博治、荒井洋一訳）、『中世思想原典集成9 サン＝ヴィクトル学派』、平凡社、1996年。
- Agota Kristof, *L'Analphabetè: récit autobiographique*, Éditions Zoe, 2004.
- カレン・カプラン、『移動の時代：旅からディアスボラへ』（村山淳彦訳）、未来社、2003年。
- ジョナス・メカス、『メカスの映画日記』（飯村昭子訳）、フィルムアート社、2009年（1974年）。
——『メカスの難民日記』（飯村昭子訳）、みすず書房、2011年。
- エドワード・サイード、「故国喪失についての省察」（大橋洋一訳）、『故国喪失についての省察 1』、みすず書房、2006年。
- Najat Vallaud-Belkacem, *La vie a plus d'imagination que toi*, Grasset, 2017.

(このページは空白です。)

次の問題（1－40）には、それぞれa, b, c, dの答えが与えてあります。

各問題につき、a, b, c, dのなかから、最も適当と思う答えを1つだけ選び、解答カードの相当欄をマークして、あなたの答えを示して下さい。

例 (2)

1. 古代ギリシャの都市国家（ポリス）の説明として最も適切なものを選べ。
 - a. 丘の上に神殿を建て、その麓に人々が居住することで形成された共同体。
 - b. 自治都市として発展し、黒海やカスピ海まで支配する帝国へとつながった。
 - c. 広く中東・アラブ地域まで散在し、ローマ帝国の出現まで政治的独立を保った。
 - d. 広場に人が集い、神殿や円形競技場が築かれ、一神教の宗教が成立した。

2. 資料で引用されている考え方に関して、最も適切にその内容を把握している文章は次のうちどれか。
 - a. アリストテレスによればロゴスを持つ点で人間は動物ではない。
 - b. アリストテレスの考える「蜂や群棲動物」の共同体は「想像の政治共同体」と同じものである。
 - c. アンダーソンによる「想像の政治共同体」は人が善いものをめざして自然に集まつてできた共同体である。
 - d. アンダーソンによれば言語は共同体の国家的同一性を示すためにも使用される。

3. 資料（p. 1）に引用されたアンダーソンの「19世紀半ばまでに、すべての君主が国家語としてどこかの俗語を採用」したという事態の具体例を挙げるとすれば以下のうちどれが最も適切か。ただし、各内容はどれも事実であるとする。
 - a. オランダ領東インドは、オランダ語ではなく今で言うインドネシア語によって主に支配された。
 - b. ソ連崩壊後に独立したカザフスタン共和国は、公用語だったロシア語から民族語のカザフ語へ国家語を変更した。
 - c. ダンテは14世紀に『神曲』を俗語のトスカナ方言で書いたが、リンネは18世紀に『植物の種』をラテン語で書いた。
 - d. ハンガリー王国の国家語としてマジャール語がラテン語にとって代わった。

4. ダンテの生きた時代から最も離れた時期の事柄を記述しているものは次のうちどれか。
- a. 真言宗の開祖である空海が仏教を学んだ長安にはネストリウス派キリスト教である景教の寺院も建てられていた。
 - b. のちに日本の貞享暦として取り入れられる授時暦が、イスラムの天文学をもとに郭守敬によって作られた。
 - c. 文永・弘安の役で2度にわたり蒙古軍が日本に襲来した。
 - d. マルコ・ポーロが『東方見聞録』のなかで日本を「黄金の国ジパング」としてヨーロッパに紹介した。
5. モロッコからフランスへ最短距離で海を渡る場合、どの海を越えることになるか。
- a. アドリア海
 - b. エーゲ海
 - c. 大西洋
 - d. 地中海
6. ヴァロー＝ベルカセムの文章について、筆者は「ある特殊な痛みのありかが感じられる」と述べている（資料 p. 2）。それは何から来る痛みだとするのがここでは最も適切か。
- a. 家族がベルベル人であること。
 - b. 属していた共同体を捨てること。
 - c. 異文化にうまく適応できること。
 - d. 思い出の品々を捨てること。
7. 資料（p. 2）に書かれている「比喩的に彼女が『言葉遣い』と呼ぶもの」とは何を指しているか。
- a. 失われてゆく移民前の生活習慣。
 - b. 言葉の裏に隠された真意。
 - c. 社会生活の暗黙の決まり事。
 - d. 正しいフランス語の用法。

8. ベルベル系イスラム人で『大旅行記』を著したイブン・バットゥータは、旅に出る理由のひとつとしてあちこちの国々を遍歴して歩くことが「ことのほか好き」であることをあげ、他人からも遠行漫遊を好む遍歴の人として知られていた、とある研究者は述べている。バットゥータの、旅についてのこうした捉え方および理解のされ方と最も類似した考え方あるいは捉え方を述べているのは次のうちどれか。
- 「ある朝われわれは出發する〔中略〕ある者は、卑劣な祖国を逃れることができ嬉しくて」(ボードレール)
 - 「海に出て木枯帰るところなし」(山口誓子)
 - 「大君の命畏み磯に触り海原渡る父母を置きて」(『万葉集』、防人歌)
 - 「片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやます」(芭蕉)
9. ハイデッガーの少年時代に、フランスでは、政治裁判事件として有名なドレフュス事件が起きている。ドレフュス事件の記述として最も適切なものは次のうちどれか。
- カトリックとプロテスタントの対立に人種問題がからみ、軍部の専横が強まった事件。
 - 人権の重視を主張して反ドレフュス派が政治裁判闘争を行った事件。
 - 当時のフランス世論を二分した反ユダヤ主義による冤罪事件。
 - ユダヤ人学者の機密文書持ち出し疑惑をもとにユダヤ人を排斥した事件。
10. 詩人ヘルダーリンの言葉「人は地上に詩的に住もう」をもとに、ハイデッガーは「人は地上に詩人として住もう」という考えを価値あるものとして主張した。この考え方と、資料中のハイデッガーに関する記述とから導き出せるハイデッガー的な見解として最も適切なものはどれか。
- 交通路の媒介に奉仕する詩人の言葉の延長線上に存在の故郷への道が示されている。
 - コミュニケーションの道具として言葉を使うとき、言語使用は詩的で本質的となる。
 - 詩人の言葉は故郷喪失をもたらす危険がある。
 - 存在の真理のうちに住もうための言葉は詩人の言葉のうちに聞き取ることができる。

11. 引用された牧水の短歌について、伝記的事実とは「まったく別の解釈」をすると、資料の筆者の論旨から判断してどのような解釈になるか。最も適切なものを選べ。
- 実存の寂しさの終わりを確証する歌。
 - 存在の親しい近さという故郷への旅の歌。
 - 非言語的な世界のうちに住んでいる歌。
 - 人の世の苦難を乗り越えてきた感慨の歌。
12. 資料（p. 3）の下線（1）「後者」が指すものは何か。
- Exile's Return: A Literary Odyssey of the 1920s*
 - Reflections on Exile and Other Essays*
 - 『亡命者帰る：失われた世代の文学遍歴』
 - 『ロスト・ジェネレーション：異郷からの帰還』
13. サイードのエッセー「故国喪失についての省察」において、「故国喪失」、「亡命」などに「エグザイル」とルビが振られている理由は次のうちどれか。
- 同じ語の反復的な使用を避けるため。
 - 原文における同じ語の訳し分けであることを示すため。
 - 他の著作からの引用であることを示すため。
 - 難解な漢字の読みをカタカナによって示すため。
14. ロスト・ジェネレーションの「亡命」は一種の比喩に過ぎない、と資料（p. 4）に記されている。資料の論旨に拠ればその理由は次のうちどれか。
- 「亡命」して、結局、故国には帰還できなかったから。
 - 「亡命」というよりも難民と言うべきだから。
 - 「亡命」とはいっても事実は expatriate であるから。
 - 「亡命」とも表現することができる政治的な追放だったから。

15. 資料（p. 4）の空欄（A）に入る最も適切な語は次のうちどれか。
- a. 強化
 - b. 除去
 - c. 導入
 - d. 反復
16. 「ロスト・ジェネレーション」の作家たちに関して、資料から判断すると何が言えるか。最も適切なものを選べ。
- a. 『exile's return』はサイード的にはありえない。
 - b. 『exile』と『expatriate』はサイード的には同じである。
 - c. ロスト・ジェネレーションの『exile』には祖国を甘美だと思う感情があふれていた。
 - d. ロスト・ジェネレーションの『exile』は母国の社会状況の変革と同義であった。
17. フーゴーの『ディダスカリコン』、「流謫の地について」の引用にある「第一の人」と同じ範疇（同じ性質のものが属する部類）にあるのは次のうちどれか。
- a. 完璧な人
 - b. 境界を横断する人
 - c. 世界に愛を分散させた人
 - d. 慣れ親しんだテリトリーを愛する人
18. 資料（p. 5）の空欄（B）に入る最も適切な語句は次のうちどれか。
- a. 「完全な人」の前では「力強い人」は
 - b. 「完全な人」は「纖弱な人」に次いで
 - c. 「力強い人」の前では「完全な人」は
 - d. 「力強い人」も「完全な人」も
19. 資料の筆者によるとサイードはフーゴーの考えにどのような操作をほどこしたのか。
- a. 「書くこと」を消し去った。
 - b. 「世界への愛」を消し去った。
 - c. 「天国」の代わりに「書くこと」を置いた。
 - d. 「天国」を流謫の地にした。

20. チヨリッチは「亡命を成功させるには高い代償を払わなくてはならず、ある部分で少し死ななくてはならない」と語っている。ここでいう「死」が彼にとって含意するものとは何か。
- a. 奪われた青春
 - b. 神の死
 - c. 紛争における肉親の死
 - d. 母語での執筆の断念
21. 寄る辺ない身の上にたいする「忘却でびしょ濡れになった犬」という表現は次のどれに該当するか。
- a. 暗喩
 - b. 擬人法
 - c. 写実的描写
 - d. 直喩
22. 1956年に起きたハンガリー事件の説明として最も適切なのは次のうちどれか。
- a. オーストリアに対するハンガリーの反発が大規模なデモそして暴動へとつながった。
 - b. 事件のきっかけは宗教対立によるものであり、その結果多くのハンガリー人が国外に流出した。
 - c. ソ連のスターリン批判後に起きた反政府デモが発端となって起きた動乱で、ソ連の軍事介入を招いた。
 - d. 大規模なストライキが決行され、ワレサ議長の率いる「連帶」が結成された。

23. アゴタ・クリストフの受け入れ国がもしオーストリアだったら、彼女はどうしていたと想定できるか。
- オーストリア＝ドイツ語で書いていた。
 - 何も書かなかった。
 - ハンガリー語で書いていた。
 - 母語殺しはしなかった。
24. アゴタ・クリストフにおける「書くこと」について、資料の筆者は「サイードがアドルノに認める『home』の名で呼ぶことはできるものだろうか」と述べている。その本意として最も適切なものは次のうちどれか。
- 書くことは、母語で書く以外、異郷でしかなかった。
 - 「故郷」という意味においては、『home』の名で呼ぶことができる。
 - サイードは、アドルノが『home』と呼んだものを曲解している。
 - そもそもアドルノのいう『home』は意味をなさない。
25. 『文盲』のなかでアゴタ・クリストフがいう「たったひとつの言語」とは何か。
- 聖書（「ヨハネによる福音書」）にある「言葉は神であった」というときの言語
 - 他の動物にはない人間だけに備わった言語
 - ハンガリー語
 - フランス語
26. 資料中にアイデンティティの語がある。アイデンティティの形成・確立には、人間が発達していく上で重要な時期がある。では、こうしたアイデンティティの形成・確立と関連しない用語は次のうちどれか。
- 自我が強く意識され、行動面でそれが現れる第二次反抗期。
 - 心理的に依存していた親から離れ、固有の人格として独立しようとする心理的離乳。
 - 反抗と従順、葛藤と緊張に満ちた心理状況をさすニヒリズム。
 - 二つ以上の異質な集団や社会に属し、そのいずれにも完全には属さない不安定状態にあるマージナルマン（境界人）。

27. ナチス・ドイツと最も関連の深い事項の組み合わせは次のうちどれか。
- アウシュヴィッツ、ユダヤ人排斥、エチオピア侵略。
 - アパルトヘイト、日独伊三国同盟、ホロコースト。
 - イスラム原理主義、ドイツ第三帝国、人種差別。
 - 反ユダヤ主義、ポーランド侵攻、優生学の思想。
28. ハンナ・アーレントが英語に関して「私はいまだに強いなまりがありますし、慣用表現を使えないこともしょっちゅうです」と語るとき、そこには何が示されているか。最も適切なものを選べ。
- 自分の思考を決まり文句へ流し込めないのは学者としては恥ずかしいことだ。
 - 自分の思考や感受性を形成した母語であるドイツ語を忘れてまで英語を使うことを拒んでいる。
 - 自分は母語であるドイツ語のもつてゐる生産力を英語において再生させなくてはならない。
 - 自分はもっとネイティブに近い英語発音を身につけなくてはならない。
29. アーレントは、母語を忘れるのは抑圧の結果であることが多かったと語っている。それはどのような心理を指しているか。最も適切なものを選べ。
- 他者との共通理解という故郷をつくりだすために相手に通じない母語を封印した。
 - たとえ母語であっても辛い思い出を喚起する言語を使うことを無意識のうちに禁じた。
 - 亡命した先の国家語の習得のためにあえてそこでの外国語である母語を使わないようにした。
 - 母語を忘れまいとしてかえって無意識に母語の使用を抑圧してしまった。
30. ハンナ・アーレントがドイツを逃れた1933年以降、数年間にわたり、アメリカ合衆国では、大恐慌を乗り切るため、大統領フランクリン・ローズベルトによる諸改革が行われた。この諸改革について最も適切な記述は次のうちどれか。
- 政府が自らの手で雇用を創出するという、持続的、直接的な失業救済策を行った。
 - 政府はイギリスとの経済的共同体案を取りまとめ、労働者の保護救済を図った。
 - 政府は公共資金を地方自治体に自由に使わせ、地方の活性化を図った。
 - 政府支出を調節し、減税するなどして、有効需要を一時的、間接的に調節した。

31. ナチ占領下のフランス国の標語は「勤労・家族・祖国」であった。このときのフランスの政権の性質を記述したものとして最も適切なものを選べ。
- a. 強制収容所を造り、その門に「働けば自由になる」というスローガンを掲げた政権である。
 - b. 国家主席をペタン元帥が務めヴィシーに首都を置いた政権である。
 - c. ド=ゴール大統領のもと「国家の偉大さの政策」を遂行した政権である。
 - d. ミッテラン大統領のもとフランスの主要な大企業の国有化を行った政権である。
32. チヨリッチの「もっと穏やかで賢い他所の青」(資料 p. 6) とメカスの「別の空」(資料 p. 9)について最も適切な記述はどれか。
- a. チヨリッチの「他所の青」には特定の対象はないが、メカスの「別の空」は実在する対象である。
 - b. チヨリッチの「他所の青」は言語作品のなかにしかなく、メカスの「別の空」は映像作品のなかにしかない。
 - c. チヨリッチの「他所の青」はフランスの青空を指し、メカスの「別の空」はリトニアの空を指している。
 - d. チヨリッチの「他所の青」はボスニアの空を指し、メカスの「別の空」は合衆国の大空を指している。
33. リトニアについての説明で最も適切なものは次のうちどれか。
- a. オランダ、ベルギーと共に、ベネルクスを構成する国として知られている。
 - b. ソ連からの独立を宣言したのは、ソビエト連邦構成共和国の中で最も遅かった。
 - c. 第二次世界大戦中、杉原千畝がユダヤ人救出に尽力した。
 - d. バルト三国のうち、最も北に位置している。

34. メカスはアメリカの物質主義が好きではなかったかもしれないが、ヨーロッパのスノビズムを嫌ってもいた。その彼は、友人から、「おお、アメリカなんていやな国だ。われわれヨーロッパ人はみな人間的だ、われわれは偉大だ。アメリカはスチールとガラス、それにたぶん、カネだけの国だ」と言われたことがあった。そのとき、メカスは思った、「アメリカについてなにかを言えるほど、私はまだよくアメリカを知っていない。言いたいことは、ただ」。資料で言及されたメカスの思想から判断して、今引用した文章に続く文章（「言いたいことは、ただ」のあとに続く文章）として最も適切なのは次のうちどれか。

- a. 自分はリトアニアを出てしまったからもうヨーロッパ人ではないと思っているということだ。
- b. スチールと仲良くしている人間よりは、花園を散歩しているスターインのほうがましだと思うということだ。
- c. まさに友人の言うとおりで、アメリカは物質主義、拜金主義のいやな国だと断言できるということだ。
- d. 胸に花をつけたナチよりも、スチールと仲良くしている人間のほうがいいと思うということだ。

35. メカスが指摘する、一見変哲のないものの魅力は、どういう性質を持っていると言えるか。

- a. 概念の普遍性
- b. 観念の同質性
- c. 個別なものの特殊性
- d. 表層の細部における深みの不在

36. 「人間の不幸は希望から来る」というカミュの考えに対して資料の筆者はどう考へているか。
- a. カミュの考えは希望を損なっている点で間違っている。
 - b. 幸福な「城砦の沈黙」よりも、そこから抜け出す不幸を選ぶべきだ。
 - c. 不幸の原因である希望は真実を隠蔽する美しい飾りである。
 - d. 不幸をもたらす希望を消し去ったあとの幸福を選ぶべきだ。
37. 人間の行動は時代や状況によって大きく影響される。第二次世界大戦前の日本の教育においては、教育勅語が日本人に大きな影響を及ぼした。教育勅語に関して最も適切な記述は次のうちどれか。
- a. 教育勅語においては個人の尊厳が重んじられた。
 - b. 教育勅語はドイツ帝国の教育制度に範を取った。
 - c. 教育勅語は脱亜入欧の精神を教育の場に流布することを目指した。
 - d. 教育勅語は明治天皇が発布した。
38. 故国・故郷を離れて自分が今いる国の日常生活において母語が通じることをM(1)、通じないことをM(0)とし、自分がそこを後にした、あるいはそこから離れている故国・故郷に対して郷愁を感じていることをN(1)、感じていないことをN(0)とするとき、資料に示された情報の範囲で、M(1)かつN(1)となる者は次のうち誰か。
- a. アメリカ合衆国に住むハンナ・アーレント
 - b. アメリカ合衆国に住むジョナス・メカス
 - c. スイスに住むアゴタ・クリストフ
 - d. ドイツに住むマルティン・ハイデッガー

39. 資料には、「故国喪失者」、「故国放棄者」といった言葉が出てくる。こうした人々は、言語の問題にとどまらず、多くの場合、マイノリティとして、いわゆるステレオタイプにさらされることがある。ステレオタイプの説明として最も適切なのは次のうちどれか。
- a. 多数派が、合法的に特定の集団に属する人たちに対する政策を決定・適用し、その行動を管理・統制すること。
 - b. 特定の集団に属する人たちを理由のいかんにかかわらず排除し、職業や権利を奪うなど差別すること。
 - c. 特定の集団に属する人たちに対する型にはまったものの見方をさす。必ずしも否定的な捉え方であるとは限らない。
 - d. 偏見とも呼ばれる。特定の集団に属する人たちを否定的に捉え、そうした人たちに不利益となる行動を取ったりする。
40. ポーランドの演出家クシシュトフ・ヴァルリコフスキは、演劇が「規範」(norm) の場になることはあるのか、と問われ、「〔ノーマルな演劇になれるのは〕演劇の本質を裏切ったときだけですね。〔中略〕人間についての考察、人間を知ろうとする試み、われわれの人生と行動を導いている隠された構造の探求、それらの前衛に立つことを諦めたときです」と答えている。われわれが、「ぬけがらにされて捨てられる」(メカス) のを避けるために、ヴァルリコフスキに従いかつそれを一般化すれば、芸術はどうあるべきだと言えるか。
- a. 芸術の本質を裏切る必要がある。
 - b. 後衛にいることを選び取らなくてはならない。
 - c. 人生を導いている隠された構造の遮蔽幕であるべきだ。
 - d. ノーマルではないものであるべきだ。

(このページは空白です。)

